

## 2023年度 授業についての満足度調査

1. 調査目的 ①学科の取組について評価する  
②授業で身につけるべき能力(学修成果)について評価する  
③学生自身の授業への取組みについて評価する  
④学修成果がどの程度身についたか評価する

以上の①～④から、学生の授業への満足度を調査することにより、個々の項目を精査し翌年度の授業改善の一助とする。

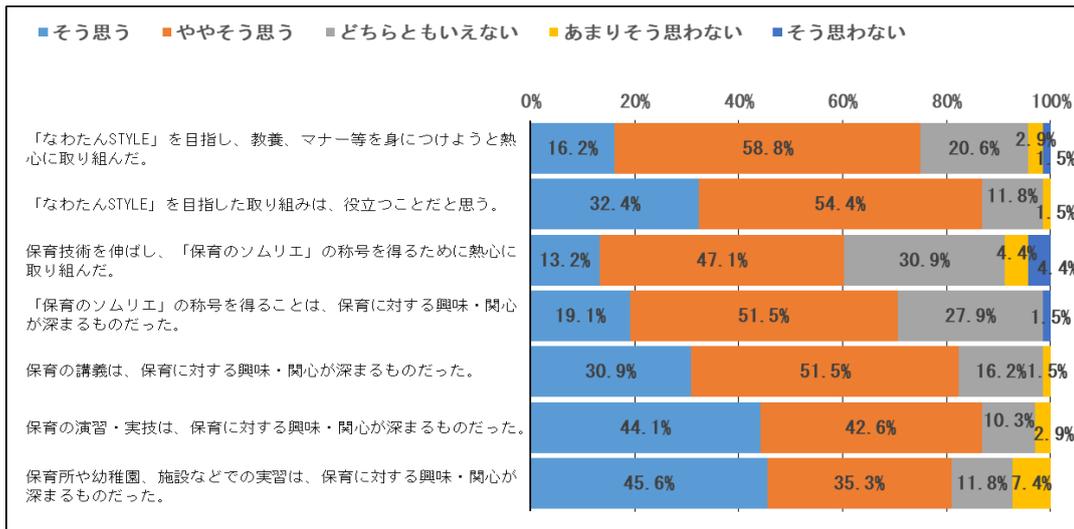
2. 実施期間 2024年1月中旬～2024年4月上旬

3. 調査回答者数 保育学科回収率 1年生 97.1% (68人)  
2年生 92.9% (91人)  
ライフデザイン総合学科回収率  
1年生 93.2% (41人)  
2年生 96.8% (61人)

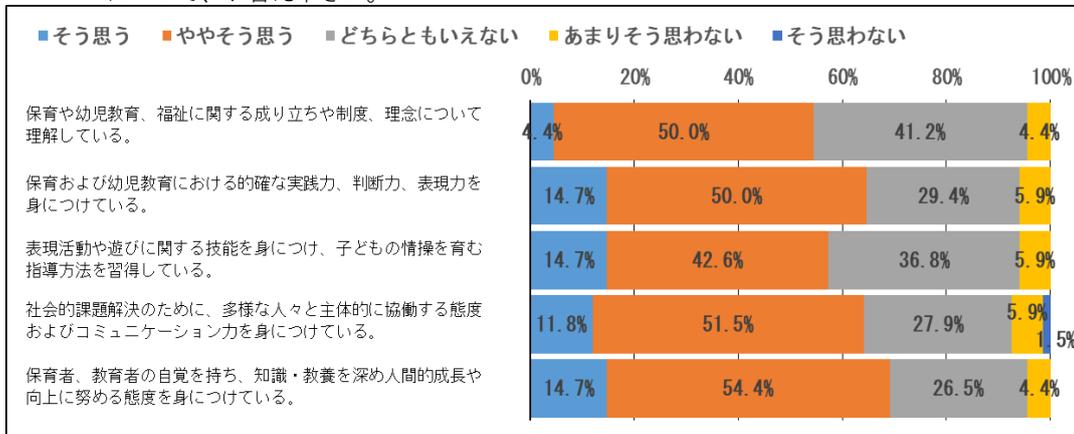
4. 調査方法 無記名のアンケート用紙で実施し、回収、集計等は教学委員が担当。

5. 結果のデータ処理 両学科それぞれの教育内容を意識した質問項目を設定している。  
ライフデザイン総合学科設問項目 I 以外では、  
“そう思う～そう思わない”の5段階評価としてグラフ化した。

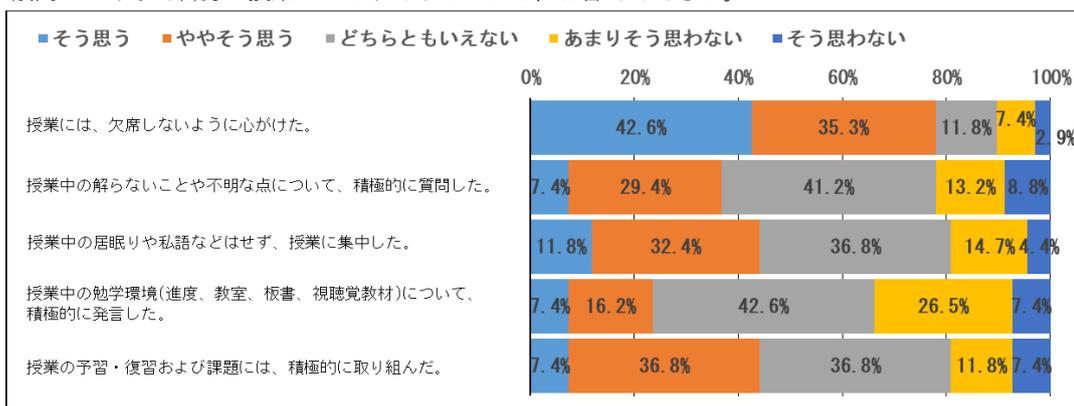
設問Ⅰ 保育学科に関する各項目について、お答え下さい。



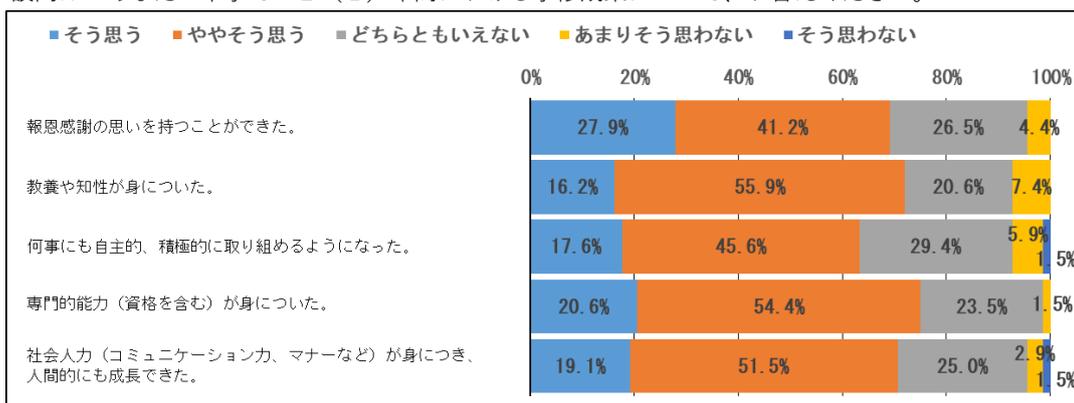
設問Ⅱ 保育学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について、お答え下さい。



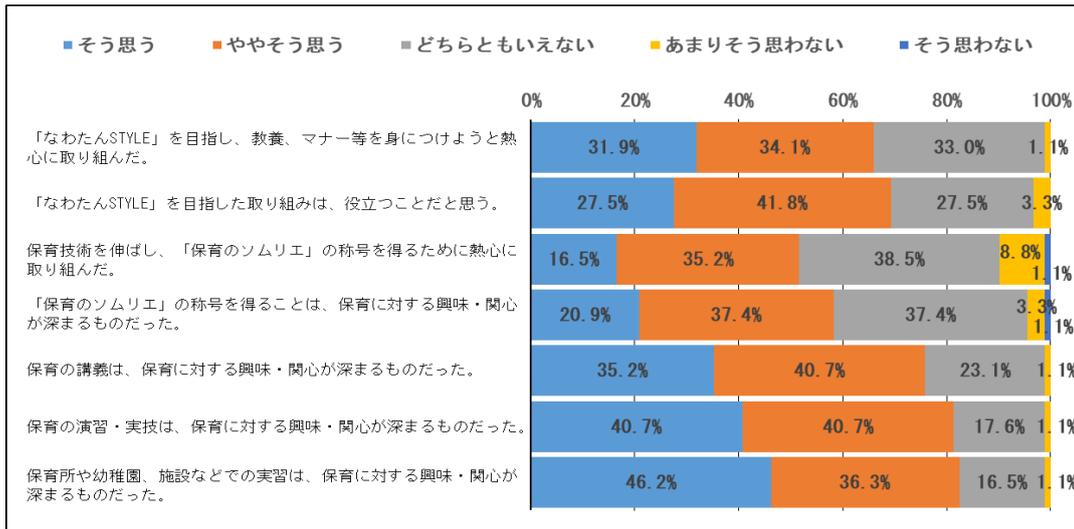
設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



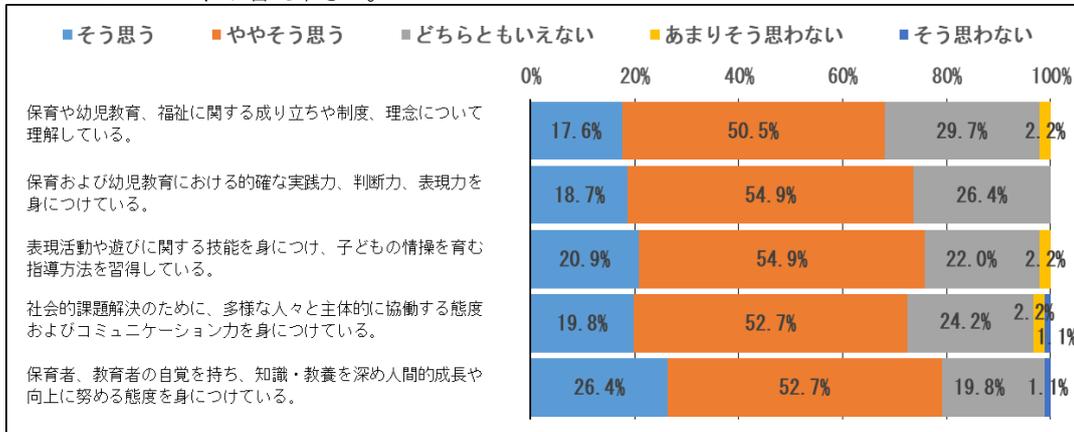
設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



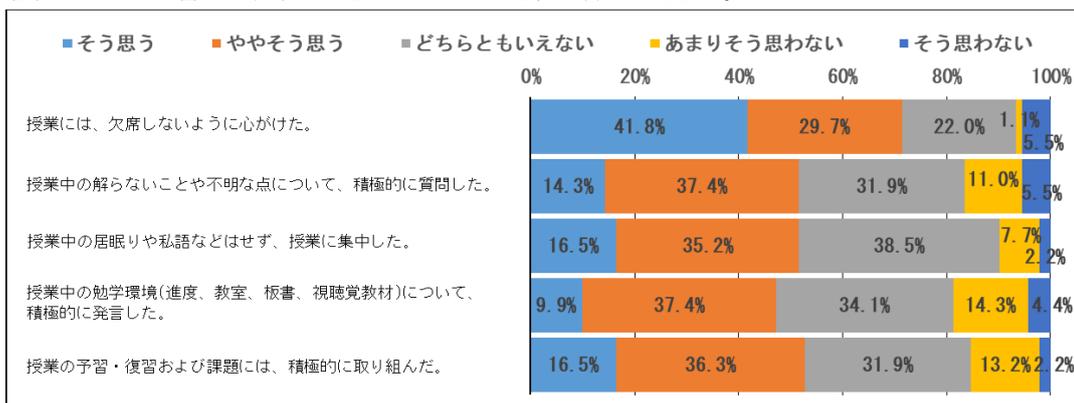
設問Ⅰ 保育学科に関する各項目について、お答え下さい。



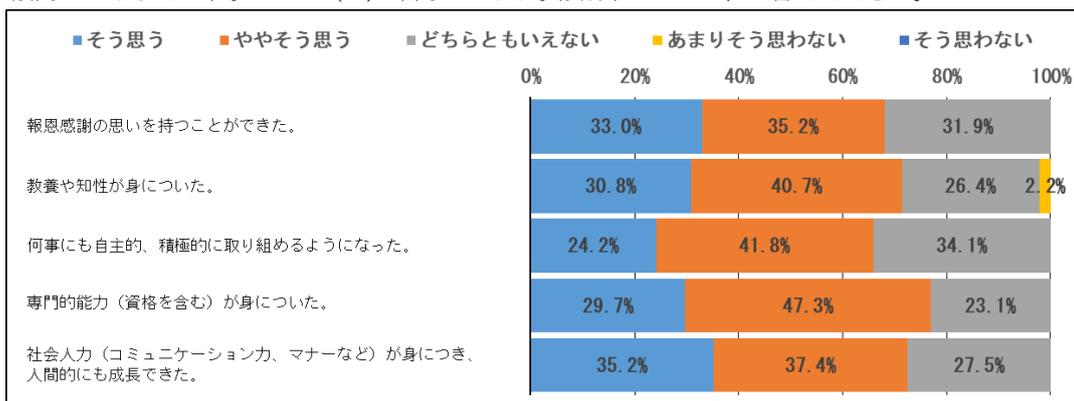
設問Ⅱ 保育学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について、お答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



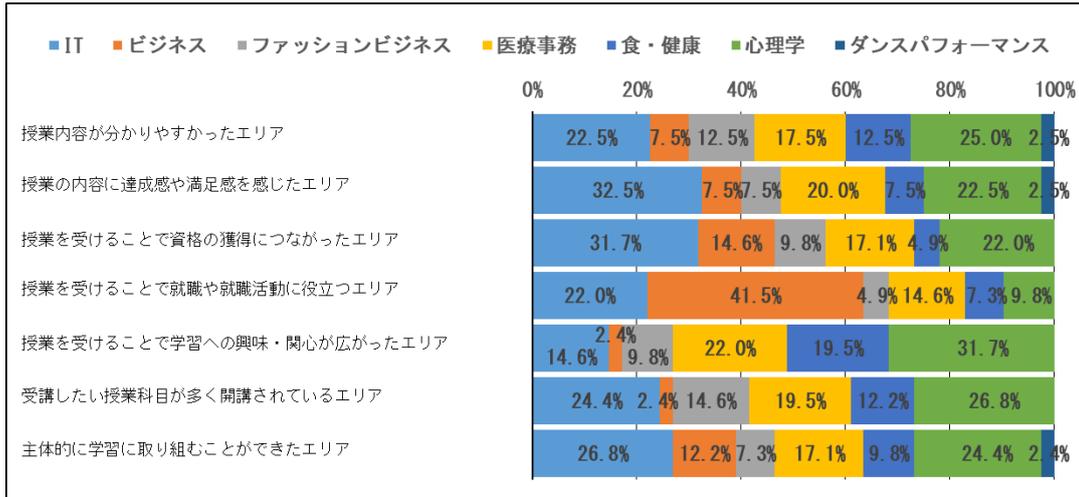
設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



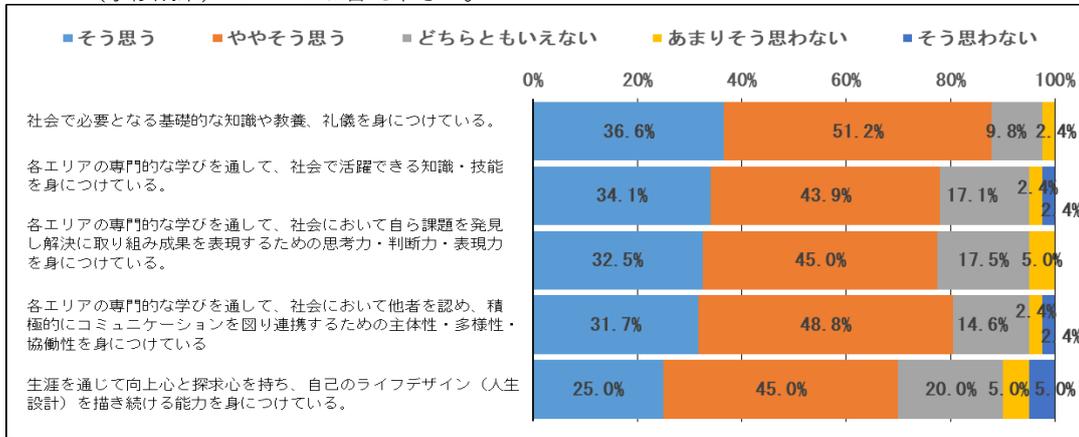
# ライフデザイン総合学科学科 1年生

回答率 93.2%

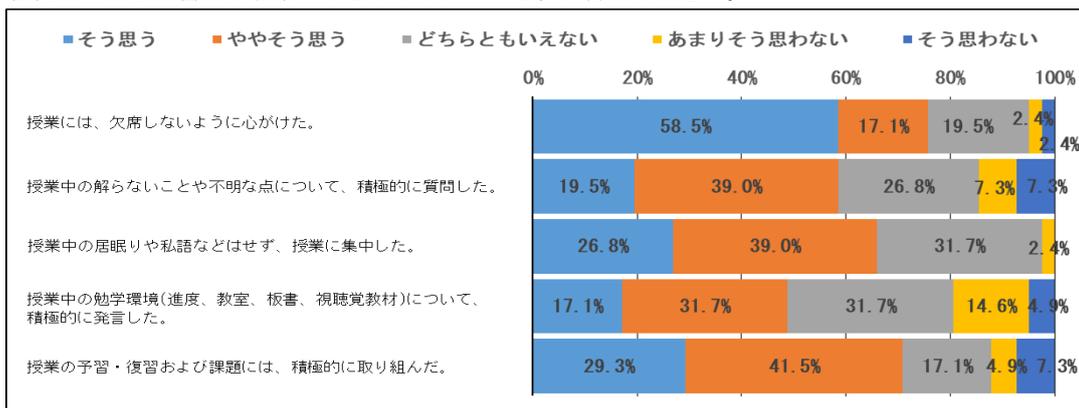
設問Ⅰ ライフデザイン総合学科のエリアについて、お答え下さい。



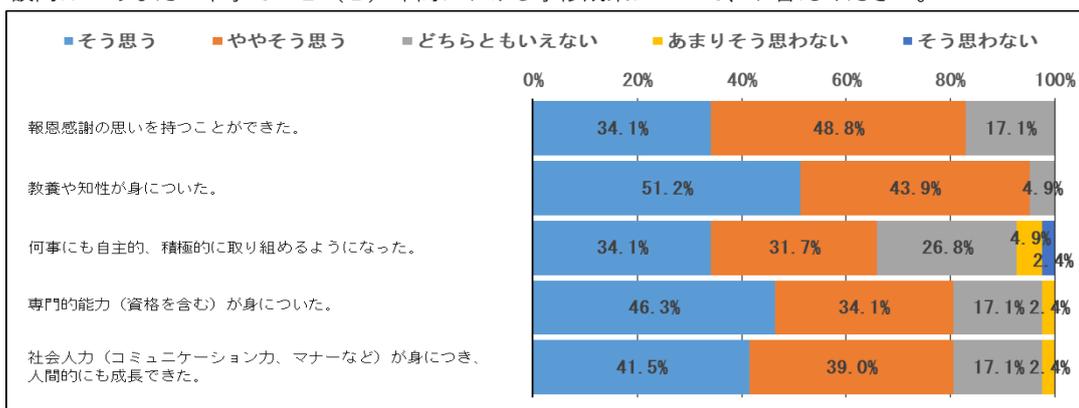
設問Ⅱ ライフデザイン総合学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力(学修成果)についてお答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



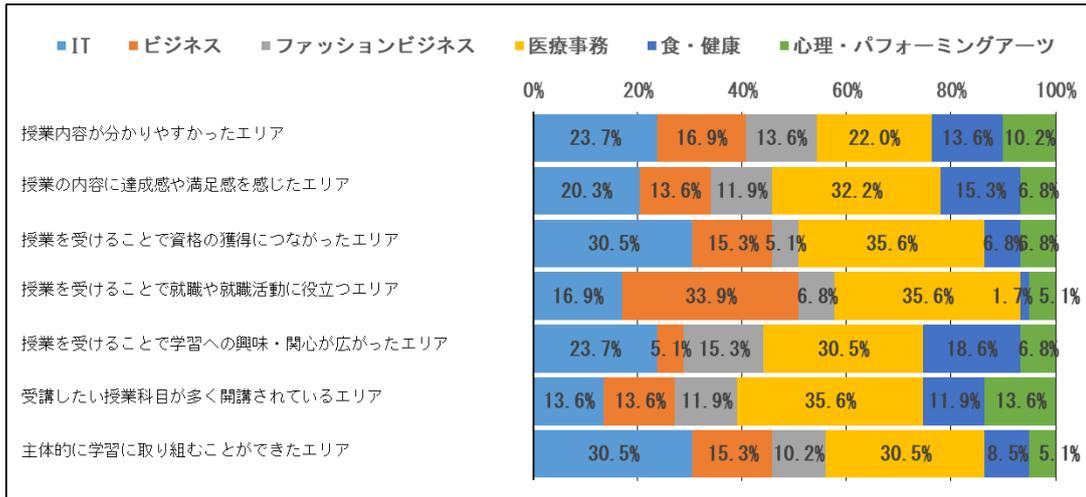
設問Ⅳ あなたの本学での2(1)年間における学修成果について、お答えください。



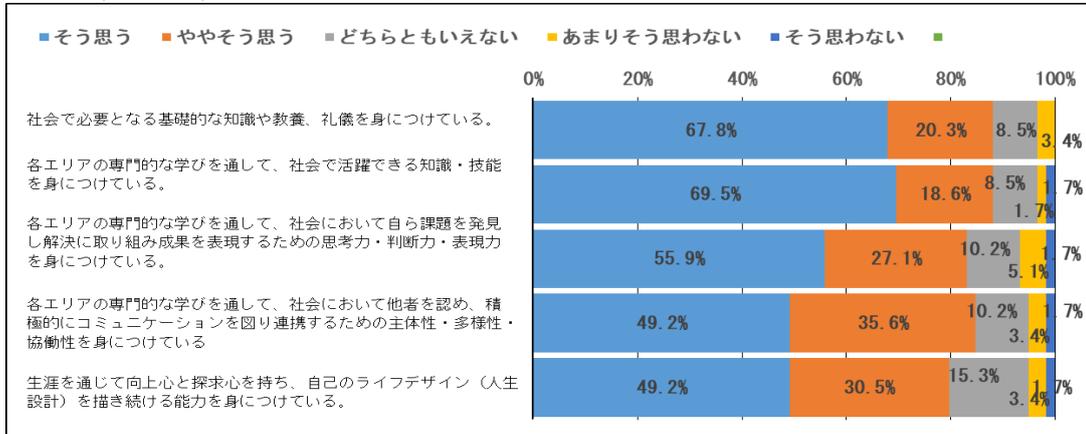
# ライフデザイン総合学科学科 2年生

回答率 96.8%

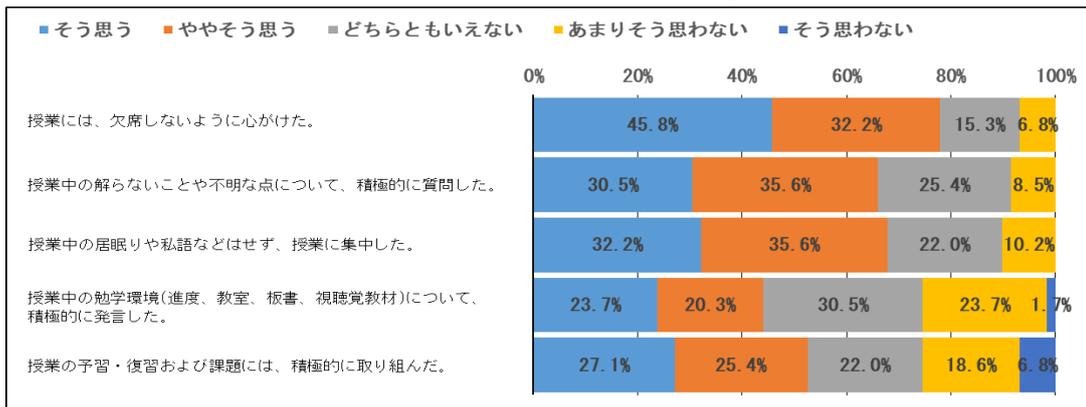
設問Ⅰ ライフデザイン総合学科のエリアについて、お答え下さい。



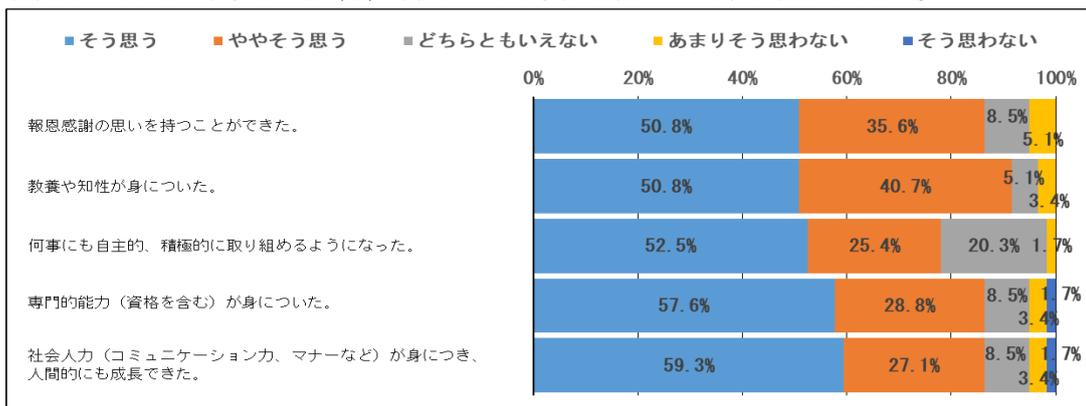
設問Ⅱ ライフデザイン総合学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に着けるべき能力（学修成果）についてお答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



## 2023 年度 授業についての満足度調査

保育学科調査結果コメント (学科長：合田誠)

### 設問項目 I 保育学科に関する項目について

「なわたん STYLE」を目指すために、「教養」や「マナー」等を「身に付けよう」と取り組んだかどうかの設問に「そう思う」及び「ややそう思う」と回答したのが1年生で75.0%、2年生で66.0%となり、両学年が7割前後の数値となった。「なわたん STYLE」の取り組みが「役立つ」かどうかの問いが、1年生で86.8%、2年生が69.3%と「そう思う」及び「ややそう思う」を選択しており、学生の多くがその必要性を認識し、保育者として身に付けたい希望が伺える。さらにその必要性を継続的に意識させる仕掛けが、「なわたん STYLE」ノートである。このノートは年間通じて各自記入してもらっており、その効果が反映されているといえる。特に1年生に浸透させるために保育実習（保育所）及び教育実習授業の冒頭に1週間の振り返りをしてもらい、次週の目標を各自が設定する方法で通年にわたり行い、各学期末に担任より一人ひとりに対してコメントを記入してもらう地道な作業が背景にあることは見逃せない。

次に「保育のソムリエ」の取り組みである。本学が設定している独自の「保育のソムリエ」称号を得るために取り組んだかどうかの問いに対して、1年生は60.3%、2年生の51.7%が「そう思う」、「ややそう思う」と回答している。1年生は昨年度とほぼ同様の数値であったが、2年生が昨年度の2年生と比較して数値が上昇したものの、ようやく半数を超えたところである。「保育のソムリエ」への取り組みが保育に対する興味や関心を深めたかどうかの問いについては1年生で70.6%、2年生が58.3%となっており、両学年とも昨年度よりその数値が低下している。「保育のソムリエ」称号を得るためだけでなく、保育者として必要となる保育技術につながる「絵本ソムリエ」、「工作ソムリエ」、「手遊びソムリエ」、「伝承ソムリエ」の4つの技術（引き出し）を身に付けたいという動機が若干薄れてきているかも知れない。しかしながら、「保育のソムリエ」を活性化させるための方策として各ソムリエの努力成果を視覚化するために「保育のソムリエ」状況の一覧表を作成し、2年次の全体授業の中で披露し、モチベーションの向上を図ったりした。

「なわたん STYLE」、「保育のソムリエ」は本学独自の取り組みである。引き続き、次年度以降も今年度の反省を踏まえて、保育者としてのモデルとなる「なわたん STYLE」、保育者の技術向上のための「保育のソムリエ」を拡充していきたい。

学習形態に関しての設問は、「実習」に関して1・2年生共に高い数値を示している。1年生は80.9%、2年生は82.5%の学生が保育に対する興味や関心が高まるかどうかの問いに「そう思う」及び「ややそう思う」と回答している。今年度も両学年共に8割を超え、「実習」が学内学習よりも高い数値を示しているのは、保育・教育現場での実践学習の場が学生にとって強い影響力を与えている証左となっている。一方で学内学習の中で「講義」が保育に対する興味や関心が高まるかの問いに「そう思う」、「ややそう思う」と回答した学生は1年生が82.5%、2年生は75.9%となり、両学年共に昨年度より数値が減少した。さらには、「演習」、「実技」科目については同様の問いに1年生が86.7%、2年生が81.4%と両学年共に昨年度と比較して低くなっている。減少した原因に関しては今しばらく動向を注

視する必要がある。

## 設問項目Ⅱ 保育学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について

5項目全体に関して1・2年生の差違が認められる。何れの項目も「そう思う」、「ややそう思う」の合計は1年生が5割から6割台となっているが、2年生は6割から7割台と10ポイント以上の差があった。この結果については、授業や実習等の学修成果の違いを明確に示していると言える。2年間の学修を終えた者と道半ばの者との違いとも言えよう。

5項目のうち例年の傾向として「保育、教育、福祉」に関する成り立ち、制度、理念に関する項目が他項目と比較して数値が低い。昨年度も言及したが、理念など抽象的な概念整理が苦手であることや、各制度の法律を主軸にした授業内容が主となるため、抵抗感なく受け入れることができていないと推察される。各授業担当者はこの傾向を理解した上で、学生の深い学びに繋がる授業改善を常に心掛けなければならない。一方では、本学が力点を置く「表現」に関する技能をはじめとする「実践力」などに関しては2年生が8割前後に迫る数値となっているのは、目に見えるかたちで保育力が身に付いていくのを実感しているからであろう。

また、5項目の教育目標に基づく学修成果は何れも必要不可欠ではあるが、とりわけ、保育者としての「素養」に関しての項目である「保育者・教育者の自覚をもち、知識、教養を深め人間的な成長を高めていく」項目については保育現場に着任しようとする直前の2年生が「そう思う」、「ややそう思う」の合計79.1%と5項目の中で最も高い。次年度以降も各教員はさらにその数値を高める努力を学修成果のみならず、学生指導全般から見直して向上させていくように取り組んでいかねばならない。

## 設問項目Ⅲ 授業への取り組みについて

授業への取り組みの結果は1・2年生共に昨年に引き続いて今年度も各項目によって共通する項目と差異が認められる項目があった。まず1・2年生が一致して高い数値を示したのは「欠席しないように心がけた」である。2年生は「そう思う」、「ややそう思う」の合計は71.5%、1年生は77.9%と高い数値となっている。特に1年生は4月当初の新生ガイダンス時より出席することの重要性を繰り返し説明してきたため、その認識が強く印象づけられたためと考えられる。2年生も欠席が重なれば「失格」に繋がる意識が十分に認知されていたのではないかと思われる。従来 of 対面授業が昨年続いて今年度も完全実施でき、「出欠」についての意識は従来通りに定着できたと判断できる。

逆に差違が認められる項目は「勉強環境」である。2年生は「そう思う」、「ややそう思う」は47.3%、1年生は23.6%と半数に満たなかった。特に1年生の数値の低さが顕著である。この低い評価となる理由として考えられるのが、中間アンケートの自由記述によく見受けられる「授業の進行速度の改善」についての要望があげられる。概ね「授業進行」が早いとの要望が多いと聞いている。この理由に関しては教員側が最大限の配慮を要するのは言うまでもないが、近年学生側の理解力の格差が明確になってきているとの印象が強い。進行速度についての要望の裏返しは、理解力の差違に連動してきて

いる。「居眠りせず授業に集中した」との設問には2年生は「そう思う」と「ややそう思う」は51.7%であったのに対し、1年生は44.2%と10ポイント近く低い結果が出ている。これは、前述したように、1・2年生間の理解力の差が認められるのではないだろうか。

さらに1・2年生で明らかな違いがあった項目は「予習・復習への取り組み」についてである。2年生は「そう思う」、「ややそう思う」と回答したのが、52.8%であったのに対し、1年生は44.2%と約10ポイント近くの差があった。この理由も同様に学年単位での理解力の差が反映されているかも知れない。

授業への取り組みについて、1年生が2年生と比較して「欠席」しないよう心掛ける意識以外の4項目が総じて低下している点に着目し、次年度以降の改善ポイントとしてキイポイントになるのではと考えている。

#### 設問項目IV 学修成果について

2年続いて1・2年生とも学習成果に関してすべての項目に比較的高率を示している。5項目全てが「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて7割前後となっている。特に「社会人力」の問いかけに関しては、2年生が35.2%「そう思う」と答えたのに対して1年生は19.1%と10ポイント以上高くなっている。コミュニケーション能力やマナーなどに関しては2年間の積み重ねで、とりわけ実習経験が個人的な成長を果たしたと実感しているのであろう。

さらに2年生は「報恩感謝の思いをもつ」については33.0%が「そう思う」と応えている。1年生は「そう思う」と応えたのが27.9%であった。建学の精神である「報恩感謝」が2年間の学修過程のなかで醸成化され、意識化されたことは教員や学生自身が授業中だけでなく、学生生活全般を通じて地道な努力がこの成果に結実したといえる。

「社会人力」、「報恩感謝」に続いて高い数値をであったのが「教養や知性が身に付く」である。2年生が「そう思う」と回答したのが30.8%であった。1年生は16.2%とかなりの開きが見て取れる。これも1・2年のポイント数の開きに関しては1年間と2年間の経験の差があるためと考えられる。

以上の3項目が2年生は「そう思う」と応えている数値が最も高い順である。ここに「ややそう思う」を加えると、1・2年生ともに「専門的能力が身に付く」が第1位となる。1年間、2年間、保育・教育の専門的能力の修得が学生にとって、最大の学修成果になっているとしたことは目的学科の役割が果たしていると評価できる。

2年生は修得した学修成果を4月より保育現場や社会人としてこの成果を惜しみなく発揮してほしい。

1年生は5つの全設問が2年次の終了時には、さらに高い数値を得られるように各教員は向上心を常に持ちながら取り組んでいかねばならない。

## 2023 年度 授業についての満足度調査

ライフデザイン総合学科調査結果コメント（学科長：工藤真由美）

### 設問項目Ⅰ ライフデザイン総合学科のエリアについて

ライフデザイン総合学科には7つのエリア（専門科目群）が存在し、学生は自由にどのエリアからも授業科目を選択し受講できる。それぞれのエリアには、授業を通して取得できる資格や称号があり、中には支援講座となっている科目もある。学生は将来の進路の選択とも照合し、資格や称号取得などを、バランスよく考え、期初の教務ガイダンスを受け、受講科目を選択して履修登録を行う。また、将来の進路や取得希望の資格・称号が未定の学生も現在の興味に従い、シラバスを熟読しながら受講を決定していく。ゆえに学生によって、1つのエリアの科目を集中的に履修する場合や、柱となるエリアを決め、関連すると思われるエリアから周遍的な科目を履修する場合、さらには、7エリアをバランスよく履修し自己の興味や適性などを見極めようとする場合など、様々なエリア配分で履修している。

7つの質問項目のうち、「授業内容がわかりやすいエリア」、「授業の内容に達成感満足を感じたエリア」、「授業を受けることで資格の獲得に繋がったエリア」、「授業を受けることで学習への興味・関心が広がったエリア」、「受講したい授業科目が多く開講されているエリア」、「主体的に学習に取り組むことができたエリア」、これらの6つの質問に対する回答の上位2つを占めるエリアは、例年1、2年生ともに同じエリアで、「IT エリア」と「医療事務エリア」である。そして唯一「授業を受けることで就職や就職活動に役立つエリア」は、例年1、2年生ともに「IT エリア」と「ビジネスエリア」である。

しかしながら今年度は、2年生は例年と同じ傾向を示しているものの、1年生は全く異なる傾向を示している。7項目中、「就職や就職活動に役立つエリア」以外の6項目で、「医療事務エリア」に代わり、「心理学エリア」が1位または2位を占めた。今年度の大きな特徴といえる。また「授業を受けることで興味関心が広がったエリア」では1年生の3位に「食・健康エリア」19.5%、「受講したい授業科目が多いエリア」では、1年生の4位に「ファッションビジネスえりあ」が位置していることも特筆すべきである。今後の傾向についても注視していく。

### 設問項目Ⅱ ライフデザイン総合学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について

1年生は「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」、「社会で活躍できる知識技能を身につけている」、「思考力判断力表現力を身につけている」、「主体性多様性協働性を身につけている」、「ライフデザインを描き続ける能力を身につけている」というすべての学修成果について、いずれにおいてもそう思う、ややそう思う、の合計が、70%から87.8%であり、高い数字を示している。「ライフデザインを描き続ける能力を身につけている」は一番低い数字で70%であった。それは2年間の学びの折

り返し地点での評価であるため、将来像を描き切れていないことに由来するものと推察する。また、「社会で活躍できる知識技能を身につけている」、「主体性多様性協働性を身につけている」、「ライフデザインを描き続ける能力を身につけている」の質問項目で、そう思わない、と回答したものが2.4%から5%いるので、2年間の学びの中で選択者がいなくなることを期待したい。一方、「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」の項目はそう思うが、36.6%、「社会で活躍できる知識技能を身につけている」の項目は、そう思うが、34.1%で、多くの学生が自信をもって評価していることがうかがえる。特に入学直後から礼儀マナー教育に力を注いでいることや、専門エリアの学びから社会で活躍できる知識、技能の獲得が評価されたこの数字は喜ばしいと思う。

2年生になるとすべての項目で、そう思う、ややそう思うの合計が79.7%から88.1%と高い数値になっている。特に「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」では、思わないと回答したものは皆無であった。また、「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」と「社会で活躍できる知識技能を身につけている」で67.8%から69.5%がそう思うと自信をもって回答していることは大変喜ばしい。

#### 設問項目Ⅲ あなた自身の授業への取り組みについて

1、2年生とも同じような回答の傾向であった。「授業に欠席しないように心がけた」はそう思う、ややそう思う、を合わせて1年生75.6%、2年生78%であった。「積極的に質問した」1年生59.5%、2年生66.1%、「授業中私語せず集中した」1年生65.8%、2年生67.8%、「勉強環境に積極的に発言した」1年生48%、2年生44%、「予習復習課題には積極的に取り組んだ」1年生70.8%、2年生52.5%、いずれもそう思う、ややそう思う、の合計の数字である。「予習復習課題には積極的に取り組んだ」の2年生の数字が低いのが残念である。

今後、学年を問わず、積極的な予習復習を促す仕組みと、シラバスに記載した予習復習の実行チェックを機能させることが必要である。

#### 設問項目Ⅳ あなたは本学での2（1）年間における学修成果について

そう思う、ややそう思うという積極的的回答についてみると、「報恩感謝の思いを持たた」の項目は、1年生が82.9%、2年生が86.4%、「教養や知性が身についた」の項目では、1年生が95.1%、2年生が91.5%であった。また、「自主的積極的に取り組めるようになった」が、1年生で65.8%、2年生で77.9%となっている。「専門的知識（資格含む）が身についた」の項目では、1年生が80.4%、2年生が86.4%となっている。1年生から2年生へと卒業を控えて資格取得を達成できた様子が見え、学科として掲げている資格取得の成果が数字として表れている。「社会人力が身につく人間的に成長できた」については、1年生が80.5%、2年生が86.4%であった。1年生では、「自主的積極的に取り組めるようになった」の項目でも、そう思わないと回答したものが、2.4%存在した。2年生で「専門的知識（資格含む）が身についた」「社会人力が身につく人間的に成長できた」の項目で、そう思わないと回答したものが1.7%であった。また卒業する段階で本学の建学の精神である報恩感謝

が身についていないと回答した学生が皆無であったことは喜ばしい。今後も各質問項目の満足度を向上させるように改善に努めていく。